

百獣の海王シ・シャーク 【B級サメ小説シリーズ】

?がらくた

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本のどこかにある海沿いの田舎、白鰐（しろわに）町で事件が起きる。

白鰐団地のすぐそばにある公園で親が目を離していた隙に、猫田少年が何者かに殺されたのだ。

現場には動物の毛のようなものが落ちていたが、捜査は難航。

少年の死を皮切りに次々起こる怪死に、近隣住民が騒然とする中、血とサメの匂いを嗅ぎつけた鮫斬りの異名を持つ鮫島は、ニユースを見ながら事件を静観していた……！

百獣の王と海の人喰い生物をくつつければ怖くね？という、安直な発想から生まれたシ・シャークに、斬人はどう立ち向かうのか！

キャラクター紹介

鮫島斬人（さめじま・きりと）

鮫斬りの名で知られる、黒髪の中肉中背の男。

一人称は俺様。

礼儀知らずで傲慢な性格だが、実力は本物で、数多くの不可思議なサメを殺してきた実績がある。

サメに対して独自の理論を展開していて、異性との関わりを極端に嫌う。

愛用の2本の刀はどちらにも刀身がないが、呪文を唱えることで、さまざまな形の刀身が浮かび上がるといふ。

鮫口紗子（さめぐち・さえこ）

金髪碧眼の斬人の女助手。

澆刺とした性格だが、かなりの毒舌家。

米国人父と日本人母のハーフで、あだ名はシャーク。

今までは米国で暮らしており、母に日本語を教わっている最中なので、語尾のイントネーションがちよっとおかしい。

「金髪美女といると、サメに襲われる」

という持論を持つ斬人からは、少し嫌われている（毒舌のせいもあるが）。

たまに彼に的確な突っ込みを入れてくれる、数少ない存在。

主人公の斬人視点の三人称一元視点小説です。

アルバトロ○とアサラムの社員に

「B級サメ小説を書かないと、遺伝子操作でお前の両親と姉を、サメ人間にするぞ」

と脅されて、この小説を書くに至りました。

B級映画並みの整合性を取ればいらしいので、キャラクター設定含め、適当に書いてます。

この小説はFC2ブログ、小説家になろう、ハーメルンに投稿しています。

目次

| | |
|------------------------|----|
| 頭までB級 | 1 |
| B級映画のジャケット詐欺 | 5 |
| 第3話 サメがロクにでないのが、B級サメ映画 | 12 |

頭までB級

とある男の自宅兼事務所にて

「続いてのニュースです。白鰐町にて、またも怪事件が発生しました……は……で……」

何の感情移入もしていないかのように、アナウンサーが淡々と読み上げる。

ニュースの話題は少年が最初の犠牲者になった、連続怪死事件についてだ。

どうやら現場付近には動物の毛が落ちており、その正体はなんとライオンの毛だったらしい。

近くに動物園があつて、そこから脱走したわけでもないようだ。

しかしライオンの歯の形状と、死体の噛み跡は一致せず、事件解決は難航しているとのこと。

目の前で誰かが亡くなったわけではない。

所詮は紙の上に書かれた命。

彼も事件に、心を痛めていたわけではなかった。

(謎の噛み跡、ねえ。きな臭い事件だな。もしかして俺様の出番か?)

そんなことを考えていると、玄関が勢いよく開かれた。

「斬人(きりと)ーッ。頼まれたモノ、買ってきたヨ!」

「シャークか。荷物を置いたら、さっさと出ていけ。お前みたいな金髪ねーちゃんが近くにいたら、俺までサメに襲われるだろーが。サメ映画のお約束だ」

鮫口紗子(さめぐち・さえこ)。

米国人の父と日本人の母を持つハーフで、斬人からはシャークと呼ばれる女助手が、ポリ袋片手にやってきた。

苛立つ斬人が声を荒げると

「斬人、もしかして朝から晩までB級サメ映画のこと考えてるノ?!

頭までB級だネ!」

紗子は、明るい口調で嫌味を言い放つ。

ウエーブのかかった金髪に透き通るような碧眼という、容姿に恵まれた彼女は、とんでもない毒舌家だ。

天は二物を与えず、という言葉が、彼女との出会いを通して重みを増した。

「ふざけんな！ お前に危機意識が足りないだけだ。海はもちろん、空にも陸にも家の中にも、サメはいるんだぞ！」

「wow！ 重症だね。そんなことより、お客さんだよ」

「鮫島様でいらっしやいますでしょうか。実はご依頼がありました……」

シャーコに連れられた茶色のスーツが似合う壮年の男が、斬人に訊ねた。

それなりに大きな案件が舞い込んできそうさ。

失礼のないように接さないよ。

「どういったご依頼で？」

傲慢な彼は柄にもなく、かしこまった敬語で話し始める。

助手に玄関の側にある応接室に案内させ、ソファに腰掛けてもらおうと。壮年の男はゆっくりと重たい口を開いた。

「白鰐町の連続不審死は、ご存じですか？」

「ええ、もちろん。テレビでも、今はその話題で持ち切りですから。ところで、なぜ私の元に？」

そう言われた斬人はテレビのチャンネルを回して、率直に聞いてみる。

サメ退治、しかもただのサメではない怪物退治専門の斬人の元にやってきたのだ。

何かしら情報を得てから、自分に辿り着いたのだろう。

「実はあの連続怪死事件、サメの歯でやられたみたいなんです。今朝のニュースでやっていましたんですが……」

「……あ、本当にそうみたいですな」

つけっぱなしにしていたテレビから聞こえた情報で、彼が嘘をついていない裏が取れた。

「頼みます。白鰐町の安全と息子の……勇のために……」

そういつて依頼人の男は、涙ながらに話し始めた。
彼の息子である猫田勇（ねこた・ゆう）は、この連続怪死事件の最初の犠牲者。

来年に小学校に入学する予定だったらしい。

まだまだ先のある息子がいなくなつた辛さは、想像に難くない。

「契約書はこちらです。依頼を達成した暁には、証明の写真を送らせていただきますので、住所の記入を。進捗状況を知りたい場合、メールアドレスか携帯電話の番号をお願い致します」

「はい」

「私どもは警察と違って、権力はありません。なので怪物の調査に、少々時間がかかってしまうこともあります。以上の点に、ご了承いただけますか」

前金に達成報酬の1割。

海外での調査が必要な場合は、別途料金を請求する場合があります
伝えると、猫田少年の父は全てを快諾した。

「ありがとうございます。無念を晴らしてくれたら、勇も喜んでくれると思います」

「こちらこそ。息子さんの将来を奪つた怪物、絶対に始末してみせます」

「では、失礼します」

猫田少年の父の丸い背中を見送り、玄関の扉が閉まると

「……ハア。猫かぶり疲れたな」

依頼を引き受けて、依頼主が去つた後に彼がぼやく。

出会つてしまえば退治自体は一瞬なのだが、探すまでに骨が折れる。

これから面倒で地道で、単調な作業が始まると思うと、気が滅入つた。

「話、終わったノ？」

「ああ、依頼者は最初に殺された息子の親だった。俺様にかかればシシャークなんて、すぐに殺せるさ」

「斬人、いつにもまして張り切つテル！ 優しいネー！」

嘲るようにニヤつく彼女を無視して、彼は話を進めた。

「とりあえず事件の概要を調べるか。まず被害者の特徴と、事件発生の日時と場所。そこから化け物サメの生息地を割り出すぞ。依頼こなしたら、久々に豪遊すつからな！」

「探偵みたいでかつこいいネ！ ヤキニク、ラーメン、テンプラ！ 油っこいもの、全部タベヨー！」

「俺様はそういうもんより、サメせんべえが食べたいな。ひと段落したら取り寄せるわ。それよりサメサメ。機械のサメと進〇の巨人が戦うとか、絶対に面白れえじゃん」

彼女に買ってきてもらったB級映画DVDの数々を見比べながら、斬人は独り言を呟く。

その様子を、シャーコは呆れたように眺めていた。

「oh。いい趣味してるネ。私はお菓子とアイス貰うから、ゴミ映画が見られるプラスチックゴミは、斬人の好きにしているヨ！」

「人の趣味に難癖つけんな。あと俺様の金で勝手に頼んでもいないもの、大量に買ってるんじゃないやねえ。いいから寄越せ！」

そういつて斬人は、机の上の袋に手をつ突つ込む。

取り出すとそれは、斬人の好きなのり塩味のポテトチップスだった。

「お前、これ俺のために買ってきてくれたのか？」

「うん、ソーダヨ！」

「……シャーコ。お前、案外いいやつだな」

「元々は斬人のお金だし、私の懐は痛まないしネ。斬人のお金で食べるタダメシ、最高だヨ！」

「前言撤回。テメーあんまり調子乗っていると、サメおびき寄せるための餌として使うからな。覚悟しとけよ」

ちやつかりしている彼女を睨み、ポテトチップスをバリバリ食りながら、斬人は悪態をつく。

夏の熱さを感じられるようになりつつある、6月の出来事だった。

B級映画のジャケット詐欺

依頼から数時間後

集合団地の築数十年が経過したコンクリートの壁は、黒く変色していた。

最近夕方でも明るいのだが、薄暗い夕闇に照らされた団地は人気も少なく、異様な雰囲気醸し出している。

化け物や幽霊が出ると言われれば、そのまま信じてしまいそうなほどに。

(き、気味悪いな。俺様の住んでた団地も、傍から見れば不気味だったのかもしれないねえが)

情報収集を効率よく済ませるべく、二手に分かれたシャーコは別棟の団地に向かった。

毒舌だが口数が多く快活な彼女を、これほど恋しいと感じたことはない。

あちこちに蜘蛛の巣が張られていて、人一人がギリギリ通れる階段を登る最中、他人の靴の音が鳴ると嫌でも心臓が高鳴る。

足音の主は、本当に生きた人間なのか……と。

この近辺は特に犠牲者が多いので、手を抜くわけにもいかない。

最初こそ見ず知らずの男が訪問してきたことに遺族は戸惑っていたが、ある人物からの依頼で怪物退治をするので、情報提供してほしいと言うと、彼らは快く応じてくれた。

突然の死を受け入れられない彼らにとって、自分はどう映ったのだろうか。

(あなたは私たちの希望です、か。ただ利害のためにやってるだけなんだがね。正義だの希望だの、鬱陶しい重荷まで背負わせようとするな)

用事を済ませると、情報提供者からかけられた言葉を反芻しながら、彼は電話片手にシャーコのいる別棟に向かっていく。

「今ついた。4―2号棟で合ってるよな」

「うん。斬人、4階だヨー！ 怖いからはよこーい！」

シャーコは団地から身を乗り出した彼女は、叫びながら彼を呼んだ。

携帯があるんだから、あまり騒がしくするなという文句を飲み込むと

「そうか。すぐいくから、待っていてくれ」

彼女に返事する。

その時ふと視線を感じて、そちらに目を遣ると短パン姿の少年が誰もいない公園で独り、何もない虚空をを殴り続けていた。

ボクシングの練習だろうか。

その光景を奇妙に感じたが

（あの坊主、何やってんだ？ まあ、俺様には関係ねえし、どうでもいいがな）

結局、斬人は少年を無視してシャーコの所に急ごうと歩き出す。すると

「おにいさん。腰に刀なんかぶらさげて、その年でヒーローごっこ？ 本物だったら見せてよ」

少年は斬人に、小馬鹿にしたように声を掛けてきた。

突然のことに面食らったが、赤の他人の子供に構う暇はない。

「本物なわけないだろ。本物なら銃刀法違反で捕まるんだから。俺様は用事があるんだ。この辺は危ないから、さっさと帰れよ。クソガキ」

そう返すと振り返ることなく、灰色の階段を足早に登っていく。

団地の4階にて

「シャーコ、そっちはどうだった？」

「言われた通り、被害者の人たちに話を聞いたヨ。はい、取ったメモ」

「ありがとう……ってお前、また菓子買ったのか？」

「違うヨ。貰ったノ。欲しいならあげるヨ！」

そう言われ、斬人はポリ袋の清涼飲料水を手を取った。

「好意に甘えさせてもらうか、サンキュー。しかし最近は暑くなってきたな」

「まだ6月だヨ？ 7月になったらもっと暑いだろうし、夏は何もしたくないネ」

Tシャツにホットパンツという目のやり場に困るシャークの横で、斬人はメモを見比べる。

被害者は計11名で、そのほとんどは女子供や老人だといった、力が弱く抵抗できない相手を徹底して襲っている。

しかし人間もシ・シャークも、生きていく上で、何かの命を喰らわねばならない。

SNSに投稿するための写真を撮影して食べ物を食べずに捨てる、命を粗末に扱う人間よりも、シ・シャークの方がよほど命を大事にしている。

メモの中で特に目に留まったのが、ある2つの被害だった。

「……なんか引つかかるな。被害は夕方から夜に発生してるから、このまま近辺を見回りするぞ。お前は戦えないんだから、俺様の元から離れるなよ」

「OKー」

「あ、あのっ……おにいさんたち、何してるの？」

「……お前は」

斬人とシャークの会話を遮ったのは、先ほど会った少年だった。どうやら斬人の後をつけてきたらしい。

依頼人との守秘義務は守らねばならないが、事件の調査に来たことまで隠す必要もない。

「この団地で、人間が動物に喰い殺される事件があんだろ？ 俺様たちはその動物をやっつけるために、いろいろ動いてんだよ」

斬人がそう言うと

「頼むよ、俺にも協力させて」

少年は必死の形相で、二人に懇願してきた。

その瞳には、ただならぬ覚悟が現れていた。

だが、子供一人にどうこう出来る問題ではない。

役に立ちたいという気持ちがあれだけ大きくても、足手まといになるだけだ。

「ガキに何ができるんだよ。クソして遊んで寝るのが、ガキの仕事だろ。とつとと家に帰って、ゲームでもしてろ。不用意に首つつこんでくるんじゃねえよ、ガキなんだから」

「口が悪くて危ないからネ、変なおじさんと関わったらダメだよ。オネーサンに話してミテ？」

「誰が変なおじさんだ！ 眉目秀麗の天才おにさんだろうが！」

「ガキガキうるさいな。だ、だって化け物に殺されたんだろ？ ネコちゃんの仇、取りたいんだよ」

「飼猫がいなくなったの？」

シャーコの一言に、少年は首を振って否定する。

「猫田って苗字の男の子。だから、ネコちゃん」

「仇？ もしかしてお前、最初に亡くなった猫田勇くんの友達か？」

「それは……悲しいネ。友達が急にいなくなるナンテ」

喜怒哀楽が素直なシャーコは、意気消沈する少年と同じように肩を落とす。

強情な少年を、強引に引き剥がしても無意味だ。

第一、彼に大声を出されたら犯罪を疑われかねない。

斬人はシャーコの持つポリ袋から菓子を取り出すと、少年に向かって投げた。

「おにいさん、これは……」

「それでも食って辛いことは忘れろ。あと説教は無視していいが、忠告は素直に聞け。大人が注意することってのは、それなりに意味があるんだ。いいな？」

「……うん、わかったよ」

斬人に諭されて、少年はとぼとぼと歩き出す。

これで観念したのだろうか。

「あれ好きだったのに、あの子にあげちゃったカ」

「……帰りに箱で買ってやるから、それで勘弁しろ」

「珍しく太っ腹だね。あの子、心配？」

「……出会ったばっかのクソガキだぞ？ なわけねーだろ」

「……素直じゃないネ」

「きゃああああっ」

二人が喋っている、突如として甲高い悲鳴が団地に轟いた。

(シ・シャークか？ いや、不審者とか他の可能性もあるが、そんなこと考えてる暇ねーな)

歩いて階段を降りていたのでは、間に合わない。

咄嗟にそう判断した彼は——団地から飛び降りた。

「シャーク、お前も飛び降りろ」

「ハイハイ」

「ちよっ、おにいさんもおねえさんも何してんの?! 人生いいことなしかもしれないけど、早まるのはやめて!」

無茶苦茶な要求にシャークが手慣れた様子で答えると、勘違いした少年が絶叫し、彼女のシャツを掴む。

そしてそのまま、少年も巻き添えを食って身を投げた。

「サメよ。時に天を舞って人々を恐怖に陥れよ——ギャガー!」

風の抵抗で髪の毛が逆立った斬人が腰にある刀身のない刀を鞘から抜くと、半身が機械になったサメが姿を現れる。

その奇妙なサメは斬人とシャーク、少年を背に乗せて滑空しながら、悲鳴を上げた人間の元へと向かっていく。

「スカイ・ジョーズ、安全運転ごころうさん」

「ああ、化け物が二匹も……もう終わりよお……」

顔を蒼白させた女は泣き叫びながら、地面にへたりこむ。

確かに赤の他人からすれば、スカイ・ジョーズもシ・シャークも化け物だ。

斬人は苦笑交じりに

「あんたはさっさと下がってな。俺様が解決してやるよ」
と告げると、化け物に視線を戻す。

「シ・シャーク、お前と戦(や)りたかった。かかってきな」

相対したシ・シャークは、なかなかの威圧感があった。
百獣の王ライオンと海の猛者サメ。

この組み合わせ、弱いわけがない。

弱かったら、B級映画のジャケツト詐欺並みに酷いのだ。

「グルルルル……」

歯茎を剥き出しにしたシシサメが、獅子のたてがみをなびかせた。

本能のままに目の前の獲物を食らおうとする姿は、アフリカを統べる百獣の王にふさわしい。

視線を外さずに四つ足でジリジリと距離をつめ、こちらの際を窺うシ・シャークは、獅子は兎を狩るにも全力という四文字熟語を体現していた。

「安心しな、生き物を痛めつける趣味はねえ。一瞬で始末してやる。サメ映画界の始祖よ。海の生きとし生けるもの、蹂躪せよ」

彼が瞳を閉じて呪文を唱えると、刀にサメの歯を模したような三角の歯が浮かび上がった。

刹那、猛ダツシュで斬人に近寄ったシ・シャークの爪が、斬人の肉体を貫こうとした。

「——グレートホワイト・ジョーズ。鮫の一噛み」

瞬間、彼が二つの刀を歯を噛み合わせるが如く、ぶつかり合わせる。すると、コンクリートで舗装された道路は地割れでも起きたかのようにはび割れ、辺り一帯は天災に見舞われたかのような惨状へと変わり果てた。

当然シ・シャークも斬人の攻撃を受けて無事では済まず、彼の宣言通り、勝負は一瞬で片がついた。

「……ち、やつぱりサメ映画界の名作じゃ、たいした力がでねえか」
「な、なんだよ。あああ、あの化け物が一瞬で……」

腰を抜かす少年の姿が、そこにはあった。

化け物に怯えているのか——それとも斬人に恐怖を感じているのか。

「斬人、あいかわらずすごいネ！ 周囲の迷惑なんて、まったく省みないんだー！」

「……お前に言われたかねえよ」

「私は愛嬌があるから、コジキしても許されるんだヨ！ 口も性格も

悪い、斬人とは違うノ！」

「うるせえぞ、シャーコ。グアダルーペ島のサメさんの排泄物にでもなるか？」

悪態をつきながら、斬人は証拠の写真を撮ると

「用事は終わったし、帰るぞ」

シャーコと共に、そそくさと白鰐団地を後にするのだった。

第3話 サメがロクにでないのが、B級サメ映画

次の日

シ・シャークを始末した翌日、斬人の銀行口座には、きつちりと報酬が振り込まれていた。

本当にこれで、白鰐団地の問題が片付いたのか。

一抹の不安があつたものの、気持ちに区切りをつけるべく、斬人とシャークは事務所で食事を開いていた。

「結局シ・シャークは、遺伝子操作で生まれたみたいダネ。隣町の研究所から脱走したらしいヨ」

「……また遺伝子操作かよ。だいたい遺伝子操作とか、成長ホルモンとか、密輸中に脱走とかで、サメの化け物が野に放たれるんだろ。もう慣れたわ。B級映画のお約束だし」

「斬人からしたら、あ、これB級映画で見た展開だ、って感じなのカナ？」

シャークの一言に、斬人は肯定するように頷く。

「世の中、マッドサイエンティストが多すぎるんだよ。ま、そのお陰で食いはぐれることはないけどよ」

「私たちにとってはありがたいネ。犠牲者の人には申し訳ないケド」

「まあいいや、焼肉食おうぜ」

テーブルの上には、スーパーで買いこんだ肉がずらりと並ぶ。

夏も間近に迫り、食欲が日に日に減退してくる。

「けれどこういう時こそ肉で精をつけて、明日への活力を養うべきなのだ。」

「うわ、安物のオニクは脂身がすごいネ……」

「いつも食いたいたいもん好きだけ食ってるのに、脂身とか気にすんなよ。お前が食わねえなら、俺様一人で平らげるぞ」

「それもそっか。ね、食べる時くらい腰の刀、いらなんじゃないノ？」

「いや、ダメだ。いつサメが出てくるかわからないし」

「神経質ダネ。斬人は」

プレートに置かれた肉は、ジュウジューと音を立てて焼けていく。部屋中に香ばしい匂いが漂うと、ただでさえ暑い室内に、更に熱気がこもる。

斬人はたまらず、クーラーの温度を下げた。

「オニク、早く焼けろーっ」

待ち切れないシャークは、隙間なくプレートに並んだ肉を凝視しながら呟く。

斬人はそんな彼女を生暖かい眼で見つめつつ、落ち着くように論ず。

「シャーク。物事を楽しんだりするのは待つ時間が大事なんだ。ゲームも発売日まで情報集めする時間が楽しいし、カレーも寝かせた方が旨いだろ?」

「それ、寝かせてる間に雑菌が繁殖するから止めた方がいいヨ。夏場は食中毒、怖いモン」

「え、マジで? 俺様は雑菌を食べてたの?」

「マジ」

衝撃の事実を聞かされた斬人は黙りこむ。

雑菌の温床と化したカレーを食べてきても、今のところ体に問題はないが、彼女に言われ不安になった。

今までに食べたカレーのことを彼が考えていると、シャークの割り箸が根こそぎ奪い取る。

「オニクもーらいっ!」

「俺様の動揺を誘い、肉を奪うとは。やるな、シャーク。好き嫌いせず野菜も食えよ」

「エー、嫌ダ。斬人が食べてヨ」

「毎回、俺様を野菜担当にするのやめろや。つたく……」

斬人はプレートに残った僅かな肉を、タレで満たされた小皿に入れる。

焼き肉のタレを直接ご飯にぶっかけるのも、品はないが白米を食べるのに悪くない食べ方だ。

だが焼いた肉の肉汁と脂が溶け込んだタレをつけてこそ、焼き肉に合うご飯は完成する。

黄金色に染まった白米を勢いよく掻き込むと、斬人は頬をハムスターのように膨らませた。

「うんめえ〜。やつぱ肉には白米だな。サメ映画とポップコーンくらい、鉄板の組み合わせだ」

「yes!」

「そーいや忘れてたんだけどよ。飯のお供に欠かせないものといえは……」

「生ビール、それともチューハイ?」

「ジュラシック・ツインヘッド・デビルシャーク〜悪魔の巨大双頭サメ〜。やつぱこれでしょ〜」

パッケージには食欲も2倍?! サメ界に地獄の番犬オルトロス参戦! という文言が書かれていた。

煽り文句には、その手の映画が好きな人々が好みそうな腐臭を漂っている。

そのDVDを見るや否や、シャーコは落胆の溜め息を漏らす。

「……ハア」

「なんか言えよ、シャーコ。ありがとうごさいます、斬人様くらい言えるだろ。最低限の礼儀も教わってねーのか?」

「食欲が失せたヨ。ここまで馬鹿とは思わなかったケド」

「俺様は酒が飲めないからないぞ。自腹で買ってこい……と言いたいところだが、お前が飲むかと思つて、1本だけな」

さすがに焼き肉に酒も飲めないのは、味気ないだろう。

ぶつきらぼうにビールを彼女に差し出すと、シャーコは瞳に涙を浮かべて、彼を見つめた。

「……斬人……っ!」

「うおっ、ちよっ、やめろ! バカヤロー、シャーコ! 命が惜しくないのか!!!」

シャーコが斬人に抱き着いた刹那——ガラス窓を突き破って二匹、フローリングから一匹、サメが斬人とシャーコに向かって、飛び

かかってきた。

このままだと、二人とも食われてしまう。

「サメよ。時に悪魔の化身と一体となって海の生きとし生けるもの、捕らえん。究極呪文——アルバートロス！」

呪文を叫ぶと、タコの触手が襲ってきた三体のサメを背後から捕らえ、二人はなんとか事なきを得る。

突然のサメの強襲に、シャーコはうずくまりながら、彼に問いたずねた。

「な、なんで急にサメが四方八方から出てきたの？」

「知らないのか、男女がイチャついたらサメが寄ってくるんだって。クリスマスとバレンタインにサメの雨が降るのは、この国の常識だぞ」

四方を海に囲まれた島国である日本も当然、サメに支配されていた。

一説では国会議員や警察官僚、裁判官の約半数が、サメと人間のハーフだと言われている。

「ふーん、そんな国に住んでるのに動じないジャップはすごいネ」

「自分を生み出したマッドサイエンティストや、仲のいい男女カップルを優先的に食い殺す。それがサメの習性だ。サメは人を襲わないとか血に寄ってくるとか、研究者どもの嘘っぱちだからな。俺様の言うことが全て正しい。俺様が神様だ」

「斬人が神様だったら、地球の生物が全部サメにナリソウ」

「これでわかったろう。日本は安全な国じゃないんだ。シャーコも胸に刻んでおけ。それより壁とフローリング、また修理しねーといけないな」

斬人の視線の先には、ガラスの破片があちこちに散らばっている。フローリングにできた大きな穴を覗き込むと、深い闇がどこまでも続いていた。

しかし、こんな生活にも慣れた斬人は別段動じることなく、胡坐を組み直すと、シャーコに声を掛ける。

「邪魔が入ったけど、とにかく仕切り直した。まずは飯、食おう」

「イエーイ、オニクー」

クーラーの送風音に掻き消されぬよう、いつもよりテレビの音量を大きめにして、斬人はDVDを再生する。

だが開始10分以上経過しても、パッケージに描かれたサメは現れなかった。

物語の掴みの部分でサメが出なかったら、いつサメが出てくるというのか。

苦虫を噛み潰したように液晶画面を眺め続ける二人の口数は、作品のつまらなさと同比例するように増えていく。

「この映画、ずっと森の中を歩いてるヨ。あと、たまに女優の人がゲロ吐いてるネ。ゲイジユツ作品?!」

「……浅い。お前はまだまだ、B級映画界限(このせかい)の本質をわかってないな。退屈な時間があってこそ、サメが出てきた瞬間が輝くんだ。一晩寝かせたカレーのように」

「腐りきっててこの映画、食べたもんじゃないヨ。ゲテモノ食いは一人で楽しんでネ」

質問するシャークを見下したように斬人が口角を吊り上げるも、至極まっとうな正論に斬人は顔を歪めた。

「そう焦るな、楽しめよ。これだから時間に囚われた現代人は……」

「でもサメ映画なんだから、サメが出ないとツマラナイヨ」

「お前はなにか勘違いしてるな。サメ映画にサメはほとんど出ない。何故ならサメ映画だからだ!」

「哲学カナ? 本当に斬人は常識外れのシャークバカダネ」

斬人の意味不明な発言に、シャークも困惑を隠せない。

「サメ映画なんだから、サメはロクに出ないに決まってるだろ。大半が人間同士のくだらない言い争いと、痴話げんかだぞ。これみたいに延々、環境映像を見せられるパターンもある」

「そっか。予算不足だから薄い内容を、80分近くまで引き伸ばしてるんだネ!」

「まあ……お前じゃわからないか。このZ級映画界限(レベル)の話は」

「わからない方が、幸せに生きられるのは良かったヨ。もうクソみたいな映画の話しないデネ」

水を得た魚のように映画の話を続けようとした斬人との会話を、シャークは一方的に打ち切った。

サメの頭が2つになつたから、なんだというのか。

サメが悪魔になる必然性が、物語にあるのか。

太古のサメ、メガロドンが蘇っても、それが作品の面白さに繋がらないのなら無意味ではないか。

シャークの冷徹な瞳は、Z級映画の666箇所以上ある粗の一つ一つを、これでもかと酷評していた。

「……シャーク、怖い顔するなよ。今度から一人で観るから……って、急になんだ」

彼女と会話していると、突然電話が鳴った。

電話の主は、猫田少年の父親からだ。

「鮫島です。振り込み、ありがとうございます。また何かご用で……」
「ま、また人が化け物に殺されましたよ。鮫島さん、化け物はいなくなつたんじゃないんですか?! 鮫島さん! 鮫島さん!」

「えっ、それは本当ですか?」

まくしたてるように、猫田父が話す。

荒い息遣いで、動揺がこちらにまで伝わってきて、斬人は最低限の相槌だけ返して、最後まで彼の話を黙って聞く。

「……まだ終わってなかった」

電話が切れると斬人は、シャークに向けて呟いた。

「一から説明シテ?」

「ずっと引つかかってたんだ。メモを見比べていた時、A棟とC棟で、ほとんど同時刻に被害が発生していたことがな」

「それ、どういうコト?」

「最初は1匹だけだと思ってたが——シ・シャークは1匹じゃなかったんだ。白鰐団地の連中が危ないな。今日の夜に残ったサメども、まとめて仕留めるぞ」

「でも報酬はもらったし、後はどうでもよくナイ? わざわざそこま

でしなくテモ」

彼女の言うとおりの嘘偽りなく依頼を遂行したのだから、自分たちは自分なりに仕事を全うしたと胸を張って言える。

命を賭けてまで、依頼者に下らない義理立てをする必要もない。

——だが、それでも。

(依頼を完璧にこなせなかったら、俺様の名前に傷がつくだろうがよ。シ・シャーク、待ってやがれ)

彼の中で、既に結論は決まっていた。

「確かに既に済んだ問題だ。シャークは好きにすればいい。つまんねえプライドが、俺様の凡ミスを許さねえだけだからよ」

「しようがないな。最後まで乗りかかった泥舟、付き合うヨ！」

「いい相方を持ったな、俺は。食い終わったら、白鰐団地にいくぞ！」

そういうと二人は、食べるというよりも吸い込むとしか形容できない早食いで、プレートの上の肉や野菜を片付けていくのだった。